

## 張文環小說中女主角之戀愛感情觀 — 毀滅或生存

北見 吉弘 \*

### 摘要

就張文環小說中的年輕女性形象而言，戀愛感情的描寫是不可或缺的要素。事實上，在張文環小說中，有許多極富魅力的女性人物，從少女時期到適婚年齡期的婚前女性，以及結婚後的少婦等等。主要區分為非傳統的新女性和依循傳統風俗的舊女性，作品主要描述這些女性和男性戀愛、談婚事和結婚等和異性之間的相處交往。

這些女性形象也被質疑是否具有適應社會的能力，作家將她們分為毀滅型和生存型。屬於生存型或毀滅型的關鍵之一，就是對於戀愛感情處理的方式和態度。

在此，筆者試著探究這些女主角們對戀愛感情的處理態度，以及介於生存或毀滅之命運，所描繪出的新女性形象和舊女性形象之人物設定。

關鍵詞：張文環、台灣文學、新女性、傳統女性

---

\* 育達科技大學應用日語系助理教授



# 張文環小説ヒロイン像の恋愛感情の対処 - 破滅と生存をめぐる

北見 吉弘 \*

## 摘要

張文環小説のヒロイン像は恋愛感情をめぐる内面描写が不可欠な要素となっている。実際、張文環小説では魅力的なヒロイン像が多く登場し、少女時代から娘時代に於ける未婚の女性、結婚後間もない若妻像が中心となる。これらは主に非伝統的な新女性と、伝統的風習に従う旧女性に分類され、いずれも多く男性との恋愛、縁談、結婚など異性との交際が描かれている。

また、これらヒロイン像は社会的適応能力の有無が問われ、破滅型か生存型に分類される傾向が強い。その際、生存と破滅に大きく関わるのがそれぞれ人物像の恋愛感情への対処のありかたである。

今回、筆者が試みたのが、ヒロイン像の恋愛感情の対処の様子と、その生存と破滅をめぐる設けられた新女性像と旧女性像の両者における人物設定傾向の提示である。

キーワード: 張文環、台湾文学、新女性、伝統的女性

---

\* 育達科技大学応用日本語学科助理教授



# The Deals with Love Feelings by the Heroines in the Zhang Wen-Huan's Novel Works About the Ruin or the Survival of the Characters

Yoshihiro Kitami \*

## Abstract

By the interiority description of the heroine of the Zhang Wen-Huan novel, the love feelings are indispensable elements. Actually, a lot of attractive heroines appear with the Zhang Wen-Huan novel works, all of those are single women, included from little girl, daughter, and young wife who just married. These are classified as a nontraditional New Style Women (modern woman) and traditional Old Style Women (traditional woman), associated with the relation with man characters related with love, marriage proposal, and marriage life with heroins.

In addition, Zhang Wen-Huan novel works drowned the ability for social adaptation of these heroines, and those people are pictured as a ruin type or a survival type. The factor of survival or ruin is the measures of the love feelings that the characters tried.

What written in this thesis, are the explanation how the heroines dealt with love feelings, and the character setting style in the works that the New Style Woman and the Old Style Woman, whom characters during their survival or ruin.

**Keywords: Zhang Wen- huan, Taiwanese literature, modern woman, traditional woman**

---

\* Assistant Professor, Department of Japanese, Yu-Da University



## 1. 序

張文環小説では、伝統社会出身における思春期にある少女や、適齢期あるいは結婚後間もない女性がヒロインとして多く登場する。そこでは男尊女卑の価値観や封建的世襲制度の下、往々に被抑圧者的立場に置かれた女性の生き様が示されている。処女作「落蕾」に始まり、「みさを」、「芸姐の家」、「闖雞」など若年女性をヒロインとして設定した作品では、恋愛感情の対処をめぐり社会的生存基盤を失った破滅型の女性が中心に登場する。関連人物の描かれた作者の早期小説作品では女性の絶望や挫折が描かれ、ヒロインの自殺を匂わす結末が多いのが特徴である。こうした中、作者がその小説創作の経歴において意識したのが女性の社会適応めぐる生存型であり、まず、その創作過程において作者が提示したのが「部落の惨劇」、「地方生活」、「媳婦」における媳婦仔像であり、そして「山茶花」、「地方生活」などに描かれた知性と教養を備えた古典的女性像と、「地方生活」、「土の匂ひ」などに描かれた高学歴を有したインテリ女性像と続き、いずれも己の社会的生存基盤の確立における特有の恋愛感情対処のありかたが関わっている。

今回の研究の研究対象となる人物像は処女作「落蕾」から「土の匂ひ」までの、大戦前後の期間における作者の作家活動全盛期に発表された小説作品に登場するヒロイン像である。これら人物像は今回のテーマとなる恋愛感情のあり方と密接な造詣が施されている。主に女性主人公或いは男性主人公のヒロイン役としての登場が条件となるが、男女関係における恋愛感情の様子が描かれていない「辣菲の壺」粉婆さん（女性主人公）や「泣いてみた女」“女”（主要人物）らは対象に含まれない。なお、長篇「地に這うもの」は発表が1975年であり、作者の作家活動全盛期の作品と比べ、人物造詣のあり方が異なることで今回の研究対象からは外した。

先行研究に関しては、今回の研究が主に張文環小説の女性像をめぐる破滅と生



存に関わることで、筆者本人のこれまでの研究成果が基本となる。<sup>1</sup>また、張文環小説作品は男性人物像に比べ女性像側に多様性や深みが見られ、現在に至るまで、これら女性像に関する多くの先行研究も見られる。これらも張文環小説におけるヒロイン的役割を担う女性像が対象となることで筆者の今回の研究と関連性があると言える。<sup>2</sup>

## 2. 新女性型と旧女性をめぐるヒロイン設定の構図

### 2.1 新女性をめぐるヒロイン像の分類

まず、張文環作品の最初のヒロインが処女作「落蕾」に描かれた地方出身の新女性に始まり、早期作品では公学校教育を通じた新思想の影響を受け、恋愛至上主義的な価値観を有する人物が多い。恋愛至上主義とは作者の作品では「芸姐の家」に用いられた言葉で、「芸姐の家」ではヒロイン采雲と公学校時代の同窓である秀英の会話の遣り取りを通じ、当時の新女性が恋愛至上主義に多分なる共鳴や理解を示していた様子が描かれている。

女店員になつてゐる友達の秀英は、自分よりも頭がひらけてゐるやうな気がしてならなかつた、資本家だとか、搾取だとか、また恋愛至上主義などの言葉も飛び出したりするのである。(中略)昭和六年と云へば臺灣の凡ゆる文化運動の下火になつてゐるときである。さう云ふ影響をうけてゐるのか、秀英には話題が多く、殊に恋愛問題に就いては随分に造詣深くかんじられた。二人はまるで新女性の先覚者のやうに、胸には一杯春風を吸ひ

<sup>1</sup> 筆者の研究においては、主に新女性像関連では「張文環小説における新女性像に見られる人物造詣の特殊性」(『育達科大學報』第33期、2012)、「張文環の戦前の小説作品における新女性像 - 理想像から現実像への展開」(『育達人文社會學報』第9期、2013)が挙げられ、旧女性関係では、「張文環小説における女性人物に対する比喩表現」(『真理大學人文學報』第10期、2011)、「張文環小説における古典的女性」(『育達人文社會學報』第7期、2011)、「張文環小説作品に見られる作者の媳婦子像へのこだわり」(『世新日本語文研究』第2期、2010)等が挙げられる。

<sup>2</sup> 台湾文学全体を包括すると量が莫大なことで、最近の張文環の小説作品に限定した意味での女性人物に関する先行研究を挙げておきたい。津留信代「張文環作品裡的女性觀—日本舊殖民地下的臺灣」、『中國文學評論』復刊第1號、1993。張文薰「由『現代』觀想『故郷』」、『台灣文學研究學報』第二期、2006。丁鳳珍『成功大學中國文學研究所碩士論文 台灣日拋時期短篇小說中的女性角色』、1996。蔡瑩慧、『銘傳大學應用日語系碩士論文 張文環の『山茶花』に見られる女性像—從順と抵抗のはざまに—』、2008。許惠玫「張文環小説的女性形象分析」、『台灣文藝台灣文藝雜誌社』、1999。



込んで、梔子の花畠を通つて行く。<sup>3</sup>

恋愛至上主義が当時の新女性の興味を引くに十分なものだったことは引用にある通りである。張文環の早期作品ではこのように台湾地方社会にありながら反伝統的とみなされた恋愛至上主義を受け入れたヒロインが多く登場し、その破滅と生存の命運に大きく関わっている。以下は今回の研究で扱う新女性ヒロイン像のリストアップである。

○新女性に属するヒロイン(★：二作品以上に跨る人物)

恋愛感情尊重型－公学校教育を受けた後から適齢期になるまでの段階

主要人物　　：「落蕾」(1933.07) 秀英  
                  「山茶花」(連載1940.01～1940.05) 娟(娘期) ★  
                  「芸姐の家」(1941.05) 采雲  
物語での展開：恋愛感情の実践としての男女交際 → 破局 →  
                  破滅による悲劇的結末

恋愛感情萌芽型－思春期の段階における少女の段階

主要人物　　：「山茶花」(連載1940.01～1940.05) 娟(少女期) ★  
                  「夜猿」(1942.02) 阿美  
                  「頓悟」(1942.03) 阿蘭(少女期)  
物語での展開：初恋 → 異性への接触

恋愛感情軽視型－女学校など高学歴取得のインテリ女性タイプ

主要人物　　：「山茶花」(連載1940.01～1940.05) 嬋(娘時代)  
                  「地方生活」(1942.10) 淑  
                  「土の匂ひ」(1944.07) 阿鶯  
物語での展開：高学歴取得 → 結婚 → 生活基盤確保

<sup>3</sup> 張文環、「芸姐の家」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、東京、緑蔭書房、1999.7.20、1版、p.126。



今回の研究では新女性ヒロインを三種に分類した。最初の、恋愛感情尊重型とは主に公学校就学を最終学歴とする人物が対象で、自由恋愛に憧れた適齢期の娘像としての登場が主となり、男性主人公（作者の青年時代をモデルとした分身）の恋愛相手としての役割を担う。物語にはロマンスが主な要素となり、多くが異性の関心を引くのに十分な魅力的な女性として描かれている。続く恋愛感情萌芽型は、いずれも少女像としての登場であり、恋愛感情尊重型に属する人物の前身として描かれた傾向が強く、男性主人公（作者の少年時代における分身）の初恋相手として描かれ、かつ年齢的に俗世間的な価値観の影響を受けていないことから、前者に比べ人物造詣に施された理想化が顕著である。そして、恋愛感情軽視型とは、恋愛感情尊重型の延長上の人物であり、作者がより現実的な人物描写に徹したことで、男性主人公との異性関係をめぐるサブヒロイン的な登場となる。

以上の新女性ヒロイン像に共通する主な特徴は、伝統的婦徳観念に縛られない性格や思想性を有すること、反伝統的、現代的な女性として描かれていることである。これは男性主人公の多くが作者の人生体験を題材に、かつ作者の分身的要素を濃厚とすることが要因となり、これらヒロインは新思想や新教育を受けた作者本人の主観的感情や理想概念が多分に含まれ、作者の青年期における同年代の若者が懐いた自由恋愛願望が反映され、主に男性主人公にとっての異性憧憬の対象となっているのである。

## 2.2 旧女性をめぐるヒロイン像の分類

ここで言う旧女性とは前述した新女性とは異なり、日本による公民化政策の一つである公学校制度が普及する以前の女性一般、或いは公学校制度普及後も儒教の婦徳を重んじた伝統的な生活を強いられ、それに従った女性を指す。これら女性は世間からは女性の模範たる良妻賢母たること要せられ、厳格な封建制度の風習に則った人生を運命付けられた。張文環作品には「古典的」<sup>4</sup>という言葉も見られるが、作者の用いたこの用語は主に伝統的な漢文教育を受けた知識人女性に

---

<sup>4</sup> 注5の引用を参照されたい。



相当するもので、極めて限定された存在を意味する。<sup>5</sup>即ち、今回、筆者が方便上用いた旧女性という用語は、新女性が台頭する以前の女性全般を主な対象とするものとして解釈していただきたい。以下は旧女性をめぐる関連人物のリストアップである。

○旧女性に属するヒロイン(★：二つの部類に跨る人物)

恋愛感情被抑制型—伝統社会における主婦（婦人）

主要人物       ：「みさを」（1933.12）翠鳳  
                  「闖雞」（1942.11）月里

物語での展開   ：不運な結婚 → 不倫が原因となる悲劇的結末

恋愛感情放棄型—少女の時期に媳婦仔として貰われた女性

主要人物       ：「部落の惨劇」（1942.10）淑花  
                  「地方生活」（1942.10）婉仔（少女時代）★  
                  「媳婦」（1942.10）阿蘭

物語での展開   ：潜在的な意味での結婚 → 暫時的な意味での生存及び潜在的な意味での破滅

恋愛感情尊重型—高度な教養を培う古典的女性

主要人物       ：「山茶花」（連載1940.01～1940.05）錦雲  
                  「地方生活」（1942.10）婉仔（娘時代）★  
                  「土の匂ひ」（1944.07）“姉”  
                  「土の匂ひ」（1944.07）玉鑾

物語での展開   ：結婚 → 生存基盤の確保

---

<sup>5</sup> 作者は物語の主人公（賢）の口頭を通じ当時の女性一般（新女性に属する）を批判して次のように述べている。「教育のない女性は、賢はむしろ昔の習性をそのままに守ってもらった方が社会の秩序を保つにいいことだと思ふのである。旧思想を新思想にかへてもらふには社会的な環境が要る。それで賢は現代的な女性をみても、古典的な女性を見ても気持がいいものである。一番鼻持ちならぬのは、どつちともつかずに、何の心の準備もなく、男と手をにぎるのが現代的だと解されてゐる女である。」作者は当時の女性一般に痛烈な批判をすると同時に、「現代的」「古典的」といった女性の理想を示した。だが、此処で言う「現代的」とは社会的に自立し、伝統的束縛を被らない、思想的に熟練された“新女性”を意味し、作者は主に近代化の進んだ都会での教育を受けた女性を意図している。「古典的」とは高度な伝統的な道德教育や漢文教育を施された人物であり、「現代的」、「古典的」とも「教養」豊かな、物事の分別ができる女性を指すものである。（引用：張文環「山茶花」、『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京：緑蔭書房、1999年7月20日一版、p. 247）。





ここで挙げた人物像では、ある人物は物語における女性主人公として、そして、ある人物は主人公男性との愛憎に関わるヒロインの役割を担う。ただし、前述した三種類の新女性像が性格や価値観を互いに共有する意味での一つの人格を中心に描かれた造詣であるのに対し、リストにある旧女性三種類の場合、それぞれの種類に対し異なった性格描写が施され、三種それぞれの相互間における価値観、性格面、思想性なども異なる。このことは主に作者の小説作品のヒロインの中心が新女性像に置かれていたことが要因であると思われ、ここで言うところの旧女性像は、張文環が新女性との存在性の違いを強く意識し、それに関連して造形された後発的な人物像であったと言える。実際、新・旧女性ヒロインの設定における相互的關係は「地方生活」、「山茶花」、「土の匂ひ」など比較的後期の小説作品でかなり具体化され、新女性像の非理想化の造詣が顕著になるに伴い、旧女性が新たなヒロインとして設けられ、最後には旧女性像が張文環小説の主人公男性（作者の分身）にとっての理想的女性像、即ち真のヒロインとして設定される様相を呈している。ちなみに、リストに挙げた「土の匂ひ」「姉（節）」の場合、男性主人公の実姉（即ち主人公との恋愛感情や愛憎の要素はない）としての登場であるが、作者がかつての「地方生活」や「山茶花」などの作品における旧女性ヒロインと共通した性格描写を有することで、関連人物としてリストに挙げた。

現段階における一つの結論が、作者のヒロイン設定が旧女性ヒロインの設定が新女性ヒロインの存在をかなり意識した造詣であること、そしてそのメインヒロインの役割が初期では新女性が主であり、後の作品ではそれが旧女性に置き換えられているということである。以下では両者間の比較を通じた人物像のありかたを示したい。

### 3. 新・旧ヒロイン像の恋愛感情をめぐる対比関係

#### 3.1 恋愛感情尊重型と恋愛感情被抑制型

早期の張文環作品におけるヒロイン設定は、新女性の場合は常に作者の自伝的要素を持つ男性主人公とのロマンスの相手として想定された傾向が強く<sup>6</sup>、旧女

<sup>6</sup> 「芸姐の家」采雲のみこの範疇に相当しないが、物語における相思相愛の男性は小資産家で雑貨店経営家庭の長男であり、他の多くの新女性ヒロインの相手男性と接点が見られる。



性の場合には作者の目線からは自分より前の時代の存在となり、主に年上の女性や若い人妻の設定が多い。

まず、新女性側（結婚適齢期の娘）の主要人物では「落蕾」秀英、「芸姐の家」采雲、「山茶花」娟（娘期）が挙げられ、その造詣からは外面的な容姿から内面的な性格面に至るまで、作者の主観的な理想概念と異性憧憬の念が強く表れ<sup>7</sup>、それらが女性の内面性である自由恋愛願望と反封建的思想に結び付くかたちとなっている。これら新女性像は公学校就学を経て、新思想の影響を受け、女性自立、女性解放を望み、かつ男女自由交際を崇拝する恋愛感情尊重型の人物であったため、当時の封建制度が守られた地方社会では社会風紀を乱す反伝統的、反逆者的なタイプの女性と見なされ、不埒で非常識な女性として非難された。以下は処女作「落蕾」にて、当時の部落や村社会に生きた青年男女一般の恋愛感情をめぐる様子が描かれた箇所引用である。

村の若者達は押し寄せてくる青春の血潮に反抗して、疲れた體を早く寝まうと思つても、この明るい月夜には押へ切れない或るものが胸から沸いてくるのであつた。（中略）しかし、村の紳士旦那や奥様達は、月夜に青年達が騒々がしく唄ふのを、一種の犬のサカリの鳴き聲と解釋した。<sup>8</sup>

恋愛感情は人間が先天的に有するものであるが、封建社会においては男女の恋愛感情は厳しく抑えられ、新女性が憧れる男女自由交際などは厳禁であった。むしろ作者はこのような旧時代の風習には批判的であり、作者の創造したヒロインの登場はその不合理な社会制度に対する作者の反骨精神の表れでもある。「落蕾」秀英の場合、愛する男性との愛情を育み、あげく妊娠にまで至り、最終的に窮地に陥った悲劇的なヒロインの役割となる。その悲劇の要因が恋愛至上主義にあったことは、以下の引用から理解できる。

---

<sup>7</sup> その様子の最も濃厚に表れた人物のが「山茶花」娟であり、とりわけその女性としての魅力は公学校就学後のすでに娘に成長した段階において明確となる。「何んだか娟は先天的に教育をうけてきた娘のやうに、かしこいばかりでなく、高尚な稚氣のある花のやうに、娟の體全体から香ばしいかほりが匂ふやうに娟の姿がすがすがしく見えて、賢は心のなかで可愛い妹と叫びつづけてゐた。」（「山茶花」、p. 258）以上は男性主人公の賢の立場から成されたヒロインの魅力に対する形容である。なお、実質上の「山茶花」娟の前身たる人物である「落蕾」秀英の場合でも、「文学少女」という誉を有する教養豊かな女性としてだけでなく、主人公男性である義山の寵愛を受けるに十分な人物となっている。

<sup>8</sup> 張文環「落蕾」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 14。



義山は級で級長だつた。明仲は副級長であつた。当然彼女は義山とは境遇も同じ位だから、身分の違ふ明仲よりも彼女は義山へひそかに心を寄せてゐた。今日迄の發展は盲目的と云へば盲目的で本能的だつた。一度處女を失つた彼女は、全て心理が變化したやに結婚問題を成るだけ早めたい氣持に驅られた。<sup>9</sup>

「盲目的」、「本能的」という用語から、読者側からは人物像が理性や常識を欠如し、軽率で不埒であるという印象が受けられがちであるが、これはある意味、作者による封建制度の悪習とみなし批判するところの封建的利害結婚に対する拒絶や批判の表れであり、必ずしも作者が敢えてヒロインの反面性を暴こうとしたものではない。そもそも、自身の純粋な恋愛感情に忠実になり、それを一途に実践に移した積極性こそが、張文環小説における新女性ヒロインの持つ独特の魅力そのものなのである。即ち、作者がこれら新女性ヒロイン設定において意図したのが、男女交際厳禁の封建的風習の逆境に置かれた新女性の一途で実直な生き方、そして己の信ずる恋愛至上主義に身を捧げた美女薄命の様を描くことにあつた。<sup>10</sup>

要するに、「落蕾」から「山茶花」に至り描かれた新女性ヒロインが迎えた悲劇的運命の所在は、主には新女性と同じ時代に生まれた作者本人の新女性に対する愛憎と哀惜の念の表れとも言えるのである。

続いて、上述した新女性像に相對する意図のもとに造詣されたと見える旧女性側についての説明に移りたい。

張文環作品では家長の命に従い結婚した設定で描かれた旧女性がヒロインとして登場するが、そのような人物設定の要因は主に作者と同年代の異性が新女性であり、旧女性像は作者にとっては前の世代の女性、或いは年上の女性であつたからである。そのため、作者にとっては新思想の影響が皆無である伝統的女性としての見方が強く、「みさを」翠鳳、「闖雞」月里といった女性主人公から「山茶

<sup>9</sup> 同注8、p. 20。

<sup>10</sup> 「落蕾」秀英の場合は、「美しい薄命な花びらは今強い羽ばたきの風さへ怖れてゐる時である。秀英の腰のふくよかさは前とは違つてまさに満開した花が散る前の美しさといぢらしさであつた」（「落蕾」、p. 25）と、「芸姐の家」采雲の場合は「貧しい娘の美しさは不幸のもとになるのである。保護される籬もなければ、守るべき経済的な力もない。ただ残されてるものは精神的な力があるだけだ」（「芸姐の家」、p. 120）といった描写には作者のヒロインに対する心からの同情や愛惜の念が感じられない。



花」錦雲、「土の匂ひ」「姉」といったサブヒロイン的な女性像に至るまで、全ての人物像が家長の命により他家に嫁入りした既婚女性としての設定が施され、相応の生活描写がなされている。そのうち、「みさを」、「闖雞」など、張文環の初期作品の旧女性ヒロインは、往々に結婚後、夫婦間の恋愛感情の欠如が要因となり、孤独な寡婦の如き生活を余儀なくされた婦人像の生き方が描かれており、悲劇的ヒロインの様相を濃厚に示している。以下は「みさを」翠鳳に関する箇所引用である。

翠鳳の夫は男性的で氣が荒らく、見かけばかりは頼母しいが、事實家庭になると冷いのであつた。それに反して徳順は見かけはおとなしいが、内幕は情熱だつた。――冷い家庭で凍へさうに顫へてゐる彼女は、火を見ひ出したやうに徳順に對する思慕は致命的な戀にお落いつて了つた。<sup>11</sup>

恋愛感情欠如による孤独な生活を強いられ、禁欲的生活に追い詰められたヒロインに残された選択が不倫という反道徳的な道である。当時の男尊社会でもある封建制度の下では、男性側の浮気や女遊びは容認されても、それが女性側の場合では厳しく罰せられたのが常である。作品では不自由で虐げられ、忍耐と従属を強いられた被抑圧者としての女性の生き方が強調されている。作者がその小説創作全般を通じ封建的利害結婚への痛烈な批判を示すのも、封建制度が男尊女卑を認め、自然の理である恋愛感情や女性の真に人間味ある生き方を損なう元凶であったからに他ならない。作者はヒロインを不倫行為に駆り立てた所以が不合理な社会制度にあるものとみなし、ヒロインに対しては相応の同情を示しているのである。そのことは同様に不倫を理由に自殺に追いやられた「闖雞」月里に對する記載が参考となる。

しかし村の人達はこの女背徳者を、さかりのついた雌犬みたいと陰口を叩いて非難した。村の人々はやはり、亭主の阿勇に同情し、不埒な妻に攻撃の矢を向けた。これは一見残酷でもあるが、しかし村の一つの道徳規準を決めていることでもある。しかし若し月里に代つて云へるなら、そんなおせつかいな道徳的基準を決めるのなら、何故この一と組の男女をこゝまで

11 張文環「みさを」、『日本統治期台文 台人作家小集』第四〔張文環〕、p.34。



追ひ込んで來なければならなかつた事件に民衆の目は向かないのだらうか。こゝが即ち人に讀ませる物語りを作らせた所以ではないかと思ふのである。<sup>12</sup>

「閨雞」は作者が「みさを」に続き既婚女性の男女交際と、抑圧された家庭生活、女性の自殺を題材<sup>13</sup>にした作品である。題材的な関係上、作品からは主に適齡期の新女性がヒロインとなる恋愛物風の浪漫主義的な要素がかなり払拭されており、作者が自身の異性憧憬がもたらす主観的感情性を排除したことで、作品にはより一層の現実主義的な要素が加味され、そこに描かれているのは封建制度に自由の一切を奪われた旧女性の虐げられた現状と、それら女性が行き着くところの残酷な運命である。

以上、張文環は新・旧女性ヒロインの両者をそれぞれ封建社会の被抑圧者として扱い、共に破滅型の設定となっている。「落蕾」秀英<sup>14</sup>、「山茶花」娟<sup>15</sup>、「芸姐の家」采雲などは封建社会では生存の場のない人物として、「みさを」翠鳳、「閨雞」月里などは生存基盤の脆弱な人物として描かれ、結末はいずれもヒロインの美女薄命を暗示している。

以上、最終的には破滅型の悲劇的人物となる新・旧双方のヒロインは、己の

<sup>12</sup> 張文環「閨雞」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 237。

<sup>13</sup> 「みさを」翠鳳は愛する男性順徳と不倫中の人妻の設定である。物語は未完であるが、翠鳳の不倫が他の男に知られその男から性的関係を強要され、進退窮まるところで終わったかたちとなっている。恐らく、不倫が知られ自殺した人妻である「閨雞」月里と同様の末路がその後の展開として想像される。「閨雞」月里は物語では主人公を担い、一人の人妻の設定で、異性の関心を引くに魅力的な女性でありながら、それが災いし、家長の命により利害結婚を迫られた経緯を有する。夫が大病を患い無能者となったことで、延々と終焉することのない寡婦同然の禁欲的生活に耐え続け、その抑圧の蓄積から、やがて新女性のもつ「現代的女性美」（「閨雞」、p. 270）に目覚め、そして、己の恋愛感情に忠実に、ある公学校出のインテリ風の男性と恋に陥る。そして、二人の関係が露呈し、世間からの誹謗を受けるのであるが、月里は心中（「碧潭」への投身）を以って歪んだ封建社会に対する恨みを示す。

<sup>14</sup> 「落蕾」秀英は当時としては罪人扱いされた墮胎が他人にばれて窮地に立たされる。物語の結末はかなり陰惨とした雰囲気満たされている。「秀英は只一つの肉塊のやうにうなだれてゐた。あまり意外なことに表嫂も墓石のやうに突立つて、茫然と哀れな秀英と母を見比べて、（中略）此方でも騒ぎ立て警察迄に知られたら、秀英が殺人罪にとはれるつて、そうしたら監獄へ赤い着物だと……。 （中略）母は全く親子心中でもしたかつた。しかし秀英は、秀英は勿論淵に落とされたやうだつた。再び死の誘惑が彼女を襲つた。」（「落蕾」、p. 29～30）

<sup>15</sup> 「山茶花」娟は「落蕾」秀英と同じく愛する男性（賢）の日本留学を境に男女関係が破局し窮地に陥った女性である。以下は物語の最後の箇所を引用で、やはり娟の自殺の可能性が見られる。「……娟は最後の一句を讀むと、手紙を姉に放り出し口惜しさにあへいでるやうであつた。『東京に行つてゐるから自分を忘れる理性があるとは』と娟は賢に裏切られた口惜しさで、ほんとうに行つてやらうか、死んでやらうかとどつと地面に叩きつけられたやうに、ぐつたり床に伏せたまゝであつた。」（「山茶花」、p. 339）



恋愛感情に忠実な生き方に尽力し、奮闘した経歴を有するのが特徴である。その際、作者は封建社会の現状を考慮した上で、それらヒロインを生存型として描こうなどとは全く考慮しておらず、各ヒロインの悲劇的な末路は必然的、道理的なものとして処理しているのである。

### 3.2 恋愛感情萌芽型と恋愛感情放棄型

新女性に属する恋愛感情萌芽型と旧女性の恋愛感情放棄型に共通するのは、少女時代の生活が中心に描かれていることである。新女性ヒロイン側の場合では、男性主人公（作者の分身たる少年人物）の初恋相手としての登場が主となり、女性の穢れない恋愛感情の発露が示されているのに対し、後者の旧女性の場合では幼女の時に他家に貰われた媳婦仔がヒロインとなり、すでに相手男性が特定されたことで恋愛感情の抑制された有様が示されており、ここに両者は極端な対比関係を示している。

まず、新女性に属する恋愛感情萌芽型から論じたい。関連人物は適齢期の娘への成長途上にある少女時代の設定であるが、それが未成年であることで封建社会から一切の拘束や制約を被らない純然、無垢な様が保たれているのが特徴である。「論語と鶏」嬋、「夜猿」阿美、「頓悟」阿蘭（少女期）、「山茶花」娟（少女期）らは、純粹に自己の恋愛感情を何ら憚りなく表現し、後に成人してから生じる俗世間的な利己的、打算的、功利的な反面性は、この段階では皆無である。以下は「論語と鶏」嬋に関する引用である。

嬋の顔は月の光をうけてくつきりと大勢の人影の中から浮いてくるかのやうに見えた。「源、あたいあんたのお嫁さんになるのよ。」或るとき、花嫁のまゝごとに誘はれて、源は不安な気持ちで胸をどきまきさせながら嬋の後ろに従って歩いた。先生が見てゐはしないかとあたりに氣を配つたが、嬋はかまはずに源の手を引つ張つて急ぎ出した。(中略)こんなに我が儘な嬋と、きびしい先生との父娘のあひだの生活を源はいつもふしぎに思ふのだつた。<sup>16</sup>

<sup>16</sup> 張文環「論語と鶏」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p.167。



ここでは張文環がかつて少年期に交友した異性への思いが感じられる。「論語と鶏」嬋の魅力は男性への自主的、積極的な愛情の表明に示された伝統的女性には見られない性格である。ちなみに作品では、嬋の父親が部落の私塾の教師の設定で、論語や漢文などの伝統教育に携わる人物となり、嬋がその父親と価値観も性格も異なる女性であることが強調されている。新女性ヒロインの場合では、作者が同一人物の性格を念頭に於いていたことで、関連人物である「夜猿」阿美、「頓悟」阿蘭（少女期）、「山茶花」娟（少女期）らは、適齢期の娘像である「落蕾」秀英や「山茶花」娟と共通する思想性を有する。<sup>17</sup>即ち、これらヒロインが将来的には反封建的な生き方を実践する命運にあることは、成長後の姿として描かれた「落蕾」秀英や「山茶花」娟、或いは「地方生活」淑や「土の匂ひ」阿鶯の描写に示されている。

続いて旧女性側の恋愛感情放棄型に対する論述に入りたい。封建社会に生きる少女時代のヒロインをめぐり、作者が旧女性を対象に描いたのが新女性側と同じく少女時代を中心に描かれた媳婦仔像である。主要人物は「部落の惨劇」淑花、「媳婦」阿蘭、「地方生活」婉仔が挙げられ、全て他家に貰われた媳婦仔の設定であり、幼少にして結婚相手が既に決められた境遇にあり、恋愛感情の萌芽が抑制された人物となる。だが、作者はこれら旧女性をかつての作品で見られた破滅型としてではなく、社会的に生活基盤を確保する意味でのいわゆる生存型に描くことを意図していたことは、「部落の惨劇」の出だしで示された特殊な社会背景の設定からも明らかである。

この部落の婦達はあまりいさかひが少ないので、男女共に部落ぢゆうはまるで親類同志みたいになつてしまふのである。呉連賛の家は男の子が二人

<sup>17</sup> 「論語と鶏」嬋や「夜猿」阿美など、どれもが主人公男子に対し奔放さと大胆な反伝統的様を示す人物設定であり、後に新女性の娘時代を描いた「山茶花」娟、「地方生活」淑らに共通する。以下は「論語と鶏」嬋の他の人物像に関連する引用である。「夜猿」阿美の場合：「『あの子はおきやんで困るよ、まるで男の子みたいで。』」（「夜猿」、p. 193）、「阿美ちゃんほんとに機用で、御利巧だね。うちの民と云つたら駄目だよ」（「夜猿」、p. 193）、「頓悟」阿蘭の場合：「晴着を着、轎に乗ったせゐか。おしやまな阿蘭はひどくすましてゐた。私は他の子供達と一緒になつて、阿蘭の家の戸口に立ち並んでそれに見惚れてゐた。見てあるうち、なかの一人が阿蘭がお嫁さんに行くんだい、と冷やかしたので、阿蘭は忽ち眉を逆立て、ぺつと私達に向かつてつばを吐いた」（「頓悟」、p. 225）。「山茶花」娟（少女時代）の場合：「一体に娟は賢の目から見れば憎らしさうな子である。彼女にはまるで世の中には恐いものがないやうに男の子の頬つぺたでも平気で撲ぐるのである。公学校へ入学した匆々まで第一学期も終らないと云ふのに、先生は娟を級長にしようと云ふので賢は娟を嫌ふやうになつた」（「山茶花」、p. 41）。



も産れたのに、未だ女の子が一人もない。鄭進發の家では女の子が三人もゐるのに、男の子が一人だけだ。それなら家の二番目の女の子を君の處の長男の嫁にやろうと云ふ親同志の取り計らひで、鄭家の次女淑花が四歳の時吳連賛の家の媳婦仔になつたのである。男が二十歳になり娘が十九歳になれば二人を嫁合せよう、と両親はもらひ子とはいへ、自分達の將來の嫁になるべき女の子だから可愛がるのも當然なのである。部落はかう云つたやうなつながりで殆ど親類同志のやう形になるのだつた。それがこの部落の秩序をたもち、そして一つの社會道徳をつくつてゐるのである。<sup>18</sup>

前に挙げた「落蕾」の引用にある如く、本来作者の描いた台湾地方社会は厳格な規律と道徳觀念によって縛られた現実のものであるが、この作品では作者の主観性と創意による特殊な社会的背景が設けられている。作者が描く社会は往々に被抑圧的な女性の境遇に関連する場であるが、ここでは敢えて女性の生存を約束する社会環境が設定され、その中核を担うのが旧女性をして媳婦仔化に導く風習である。引用では現実離れした理想郷の如き様子が示されているが、換言すれば、それほどまでに作者が現実社会の旧女性の生存に対して悲観視していたこと、そして、その被抑圧者たる女性の救済を意識していたことを裏付けている。ここで注目されるのが、「部落の惨劇」のヒロインである淑花に施された「自分の家の家風に合った娘」になるべくして他家に貰われ、「自分の家の家風に合った娘」として育てられた人物設定である。このような人物設定は「媳婦」阿蘭<sup>19</sup>や「地方生活」婉仔<sup>20</sup>にも繰り返されており、新女性側の少女像と同じく、張文環小説に登場するヒロイン像の典型の一つとなっている。また、これら媳婦仔ヒロインは、封建社会への絶対的な従属に必要となる恋愛感情の放棄が義務付けられ、性格描写は上述した新女性少女像と対極的であり、作者の脳裏には多少なり新女性ヒロインの存在が意識されていたものと思われる。以下は「媳婦」阿蘭の少女時代から娘時代への成長過程における性格描写に関する引用である。

<sup>18</sup> 張文環「部落の惨劇」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 149。

<sup>19</sup> 以下は関連箇所の引用である。「阿蘭は三つのときから楊家に貰はれてきた、勿論養女ではなく媳婦仔なのである。つまり阿全の嫁になるべき養女である。だからこの家の娘のやうに育てられてきた。親として、自分の家の嫁になるべき娘は、一家ぢゅうの者とは氣心が通じ、自分の家の家風に合った娘が望ましいのである。」（「媳婦」、p. 312）

<sup>20</sup> 本研究の第4章の4.2を参考にされたい。





公學校を中途退學された阿蘭は、家事の手傳ひばかりしてゐたが、女友達に逢ふのが氣がひけていつのまにか、姑までじらされるほど卑屈な娘になつてゐた。(中略)普通の娘のやうに青春のたのしさと云つたものは遂持ち合はさなかつた。そのうちに、いつのまにか十八になつた。十八になつてみると、自分と同じ歳の娘達が急に綺麗になつたのをみておどろいた。そして阿蘭は始めて自分の將來を考へるやうになつた。時々姑に斷り、棚から紅や白粉を出して、自分の寢部屋に持つてきてはみるが、つける氣持も起こらなかつたと云ふよりもつける閑がないやうに、阿蘭は白粉をつける無駄な努力を考へるのだつた。<sup>21</sup>

ここでは許婚の阿全の我儘により公學校を中退させられたのを境に、社会的生存と引き換えに女性的魅力の喪失がなされた様子が示されている。ヒロインの公學校中退は新女性側の公學校就學と對比する意味で、旧女性としての生き方が運命付けられたことを象徴する。そして、恋愛や結婚の自由を奪われた媳婦仔ヒロインに要せられたのが、儒教の婦徳觀念に縛られた一種の恋愛感情の放棄に他ならない。続いて、以下は「地方生活」婉仔に施された性格描写に関する引用である。

婉仔も物心つく頃から、澤の嫁になると云はれてゐるので、特別王家には親しみを持つてゐるが、本能的に遠慮ぶかく、引込みがちで大膽に振るまはれなかつた。<sup>22</sup>

以上の旧女性の性格描写からも、それが新女性側の大胆で解放的で豪放な性格と相對關係にあることが理解できよう。作者がこれら旧女性ヒロインを通じ示しているのは、幼少期に結婚相手が決められたことで、幼少時にすでに恋愛感情を捨て、没個性的な生き方を強いられた旧女性の境遇である。實際、媳婦仔ヒロインが新女性ヒロインと一緒に一つの作品で描かれたのが、それら人物が娘に成長した段階を描いた「地方生活」であるが、作品では男性との恋愛感情をめぐる価値觀の對立關係がより具体化されているのが注目される。

<sup>21</sup> 張文環「媳婦」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 319～320。

<sup>22</sup> 張文環、「地方生活」、『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 279。



### 3.3 恋愛感情軽視型と恋愛感情尊重型

新・旧女性の両者がヒロイン（メイン、サブ）として一作品に出揃ったのが、「山茶花」ならびに「地方生活」、そして「土の匂ひ」の三作品である。作品「山茶花」では新女性がメインのヒロインとして描かれながら封建的利害結婚に直面した段階を境に、恋愛感情尊重型から恋愛感情軽視型へと移行する様子が示され、その後の「地方生活」、「土の匂ひ」に至っては、ほぼ恋愛感情軽視型の人物への新設定が設けられている。そして、異性憧憬の相手として新たに焦点が当てられたのが、伝統社会に生活基盤を置いた旧女性側の知識人女性の存在である。

まず新女性側に関して論じたい。「山茶花」娟は少女期においてはその恋愛感情尊重型の様子が示され、男性主人公の寵愛を受け、ヒロインとして遜色のない理想像としての設定であったが、物語の進展につれ、人物が娘へと成長して結婚問題を意識する段階になると、思想面に俗世間的、利己的な要素が加味され、徐々に恋愛感情軽視型の側面を露呈する。「山茶花」の結末には、娟の本性を見極めた相手男性（主人公の賢）が娟への恋人関係の解消を言い渡す手紙文を娟に託し、それを読んだ娟の打ちひしがれた様子が示されている。作者が「山茶花」の最終部分で描き出したのが、現実の新女性が純粋な自由恋愛に徹底できず、利己的な生活基盤確保に重点を持つものとする認識である。そういう意味ではこの「山茶花」娟は、新女性ヒロインをして理想像から現実像に至らしめた一種の橋渡し役を担う人物であり、男性主人公の相手女性として描かれ続けた新女性ヒロインの終焉となる人物であると言える。

続いて、「山茶花」娟に続いて描かれた「地方生活」淑の場合では、「山茶花」娟の分身として登場するヒロインであり、娟が最終的に培った個人主義的、利己主義的な反面性のみが強調され、結果として往来のヒロイン像の基盤であった自由恋愛崇拜の価値観は完全に払拭されている。こうして描かれた新たな新女性像である淑は恋愛至上主義の影響をいっさい受けず、また男女自由交際という非現実的な手段を犯すこともなく、極めて現実的、打算的な思想性を以って女学校進学という堅実な学歴主義を手段に生活基盤を確保した人物となっている。

また、このようなインテリ型の新女性が必ずしも限られた特殊な存在でなか



ったことは、「地方生活」に登場する「某美術研究所の女留學生」<sup>23</sup>（男性主人公「澤」の日本留学期間における片思いの相手）や「二人の花嫁」阿嬌の如く「インテリ女性」<sup>24</sup>たる名声を手段に条件の良い縁談を獲得した女性の様子に示されており、作者はそれら実際の新女性を「現代女性の虚榮の縮圖」<sup>25</sup>を体現した、極めて計算高い俗世間的な人物という考えを示している。作者は「地方生活」淑を批判して「現代的な女は案外精神力の乏しいことが澤は知つてゐた。健康な體に似はず、享樂を貪ぶりたい性格を澤は恐れてゐた」<sup>26</sup>と論じられている。即ち、新たな新女性ヒロインが恋愛感情軽視型に属することは、その結婚相手が高い身分や有望な将来性を重視して決められたことに示され、「地方生活」淑の場合は縁談相手が医学専門学校の学生、「土の匂ひ」阿鶯<sup>27</sup>の場合が資産家の男性の設定となっている如く、相手男性を選ぶ基準が身分や地位、家柄重視である打算性に象徴されている。ただし、これら新女性ヒロイン像には、かつての新女性ヒロインが懐いた封建的利害結婚への恐怖や逃避願望が払拭されており、かつ、果敢に封建的利害結婚に直面し、それを克服し己の生活基盤を確保した生存型として造詣されたことも考慮すべきである。

上述した新女性ヒロインの恋愛感情軽視型への移行は、旧女性の新たなヒロインとしての登場を促す結果となった。ここに作者が意図した旧女性における恋愛感情尊重型の典型は、道徳性や教養面が充実し、高い知性と道徳観念を備えた古典的女性である。主な対象となるのが、「山茶花」錦雲、「地方生活」婉

<sup>23</sup> 以下は作品からの関連箇所引用である。「澤はそのとき、某美術研究所の女留學生に心を奪はれてゐたので、故郷のことを顧みる心の餘裕がなかつた。しかし、所詮それが現代女性の虚榮の縮圖であり、一とたび背負ひ投げを喰はされると、澤の心は嵐の後のやうにすさんでゐても周囲の静けさに蘇生へつてくるのである。文學と美術はよき友と甘えてゐたが豈計らんや、それは現實の生活に何んの經濟的な根據を持たないのを知ると冷然として自分の姿に立ちかへつた。學校を出ても、それは一失業者の端くれであり、自惚れてゐたことが少しづつ刻づられていつた。」（「地方生活」、p. 282）

<sup>24</sup> 張文環、「二人の花嫁」、『日本統治期台湾文學 台湾人作家小説集』第四卷〔張文環〕、p. 95。

<sup>25</sup> 同注22、p. 282。

<sup>26</sup> 同注22、p. 291。

<sup>27</sup> 夫に死別され、家族を相手取り遺産相続で勝利し、農産株式会社の社長として敏腕を振るうまでに成り上がった人物として描かれている。人物に対しては「顔が圓くて、二重まぶたの目はいつも情熱をたたへてるやうに見える。それがいやみではなく、ただ山氣たつぷりなものを感じさせて、金儲けの上手な、隅に置けない女」（張文環「土の匂ひ」、『臺灣文藝』七月號（一卷第三號）、1944年7月、p. 32）という形容に描写がなされ、とりわけ「地方生活」淑の如く個人主義的、打算的な思想面や勝気で抜け目のない性格的側面を引き継いだ人物であることが分かる。



仔<sup>28</sup>、「土の匂ひ」玉鑾<sup>29</sup>、「土の匂ひ」“姉”<sup>30</sup>である。以下は「山茶花」からの引用である。

賢は田舎婦人の方が教育の有無にかかはらず、古典的な習慣がこびりついてゐるからである。女はしとやかでなければならぬこと、女は結婚するまで男と口をきかないこと、また女はみさをがあつて始めて女の資格があるのである。<sup>31</sup>

引用に「田舎婦人」とあるのは、旧女性の理想的なありかたを示したもので、即ち作者が自身より前の世代の人物を想定していることを意味し、「女はみさがあつて始めて女の資格がある」とあるのは、かつて不倫女性として登場し、いれずれも身を滅ぼす運命であつた「みさを」翠鳳や「闖雞」月里ら、これら婦人像を意識したものである。「古典的」な女性とは伝統的な漢文教育を通じた道德性を備えた良妻賢母たる得る人物であり、上記人物以外には作者の晩年の作品「地に這うもの」に登場した呉氏錦も相当する。<sup>32</sup>以下は作品「山茶花」錦雲に関する引用である。

<sup>28</sup> 以下は「地方生活」からの引用である。「澤が本を讀んでゐるとき、婉仔がきて、澤の漢文教科書をとつて、すらすらと讀むことがあるので澤は目を見張つた。第一課の日出山と云ふ所は婉仔には餘りやさしくて、赤坊の本みたいだと偉らさうな顔をして威張つた。」(p. 279)、「父は、澤、どうも嫁はお前より人間が出来てるらしい。そばにゐる母まで、嫁は山家にゐて、人間修養ばかりしてゐる、澤と違つて俗氣がない澤もそのつもりで、嫁を可愛いがつてもらはないと困る。と早くも、仲のいゝ所と見せるので、澤は案外、結婚に對する重荷がかんじられなかつた。」(p. 298)

<sup>29</sup> 以下は人物像の有する古典的女性として描かれた箇所からの引用である。「古典的な曲をかけると、庭の雞どもが音楽におどろいて、首を傾げてゐる様や、牝雞や雄雞とのいとなみを見てみると、彼は、ここにも一つの都會を想像し、云ひ知れぬ喜びを感じるのだつた。(中略)また、この近所の王といふ農家に、出戻りと云はれてる背の高い大人しい娘が、清輝の農園へ手傳ひにくるときもあつた。二十四五位の女で、目がぱつちりとして、體格もすんなりとしてゐる。顔は随分はでに見えるが着物はいつも質素で、木綿の花を挿したやうな、百姓女にしてはむしろあかぬけのした珍らしい女であつた。この娘が出戻りとは、ここにも一つの悲劇があると清輝は思はずにはゐられなかつた。」(「土の匂ひ」、p. 40)

<sup>30</sup> 詳細は第4章の4-2をご覧ください。

<sup>31</sup> 同注22、p. 247。

<sup>32</sup> 以下は作品「地に這うもの」からの呉氏錦の性格的側面、及び古典文学修養における関連した引用である。「おまけに彼が今日もらった花嫁は当時としては珍しく読書好きだという評判である」(p. 28)、「花嫁は翌朝、誰よりも早く起きなければならぬ。みなが起きているのに、花嫁はまだ寢室に残っているのは、恥ずかしいことである。誰よりもさきに起きて、髪をくしけずり、身なりをととのえて、神前や祖先の位牌の前に三杯の熱い清茶をそなえるのが、主婦の務めである。呉氏錦は神前に立ったら、昨夜の猫のことなどは忘れてしまった。重要な今日一日の仕事が待っているのである」(p. 30)、「美人で読書のたしなみのある妻」(p. 32)、「お前は里でずいぶん古書をならつたそうだね。女でも字がよめないと不便なものよ」(p. 34)。張文環『地に這うもの』、東京：現代文化社、1975年9月15日。



しかし錦雲はその代り父の血筋をうけて、昔詩賢文と云ふ昔の女が読む本を一冊叔父さんに教はつた。そのお蔭で、昔の陳杏元和番だとか孟姜女、或は三伯英台や陳三五ぐらゐは読めるので、母や妹美娟や賢なぞは姉の影響をうけて、昔話に興味を覚え、賢なぞは龍鳳配と云ふ本を学校へ持つてきて、休み時間に合歡の蔭で読んで友達にきかせたことがある。<sup>33</sup>

漢文教育は儒教の道德教育を基盤とし、これらに精通した女性は、主に貴族階級、資産家階級の出身者がほとんどで、当時の伝統社会において極めて稀な存在であったことは、「殊に姉娘の漢文の出来ることは母にとつては奇異にかんじ、昔のお姫様の産れかはつてきたやうに思はれて何事につけても娘に一目置いてみた」<sup>34</sup>との一文より理解できる。同様の造詣は他の「地方生活」婉仔、「土の匂ひ」玉鑾、「土の匂ひ」“姉”ら関連人物像にも施されている。<sup>35</sup> 作者が新たな旧女性像で意識したのが、それまで描かれ続けた恋愛感情被抑制型から、恋愛感情尊重型への転換がもたらす生存型重視の造詣である。かつての新女性ヒロインらが脱封建制度を理想実現の手段としたのが結婚前に於ける自由恋愛主義と男女自由交際であったが、旧女性ヒロインの場合は結婚後を見通しての良妻賢母たるべく円満な結婚生活の実現である。即ち古典的女性にとっての恋愛感情のありかたは前の引用に挙げた「女はしとやかでなければならぬ」、「女は結婚するまで男と口をきかない」、「女はみさをがあつて始めて女の資格がある」という伝統的婦徳観を基本とする。「みさを」翠鳳や「闍雞」月里ら初期作品における旧女性ヒロインが結婚後に相手男性からの愛情の欠如により破滅したのとは様相が異なり、古典的女性の場合は「古典的で可憐」、「懐古的でロマンチック」、「女の標本のやうに見えて、凡べての女性の模範のやうに思はれる」<sup>36</sup>など、一般の旧女性より勝った理想的とも言える要素が加味され、男性の愛情を十分に受け、かつ夫婦関係の維持ができるものとする根拠がある。即ち、これら古典的女性として描かれた旧女性ヒロインの高度な伝統的な漢文教育や道德教育を受け、幼少時より優れた人徳を養うべく精進した目的が、自身の理想的生活の実現

<sup>33</sup> 張文環「山茶花」、『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』、東京：緑蔭書房、1999.7.20、1版、p.44。

<sup>34</sup> 同注33、p.46。

<sup>35</sup> 本研究の第4章の4.2を参考にされたい。

<sup>36</sup> 同注33、p.47。



にあり、具体的には結婚後における恋愛感情の満足できる安定した生活維持に他ならない。

新たな新・旧女性ヒロイン像を描く際に作者が考慮したのが女性の生存型のありかたであり、結果として新女性の高学歴取得と旧女性の伝統的教育授与といった女性の教養を加味する新たな造詣が示された。また最終的に、新女性ヒロインが脱封建的、反逆者的な生き方を選んだのに対し、封建社会において真なる生存型として君臨したのが、伝統に忠実で、純然たる人間性を貫き、かつ己の理想を自己実現した旧女性ヒロインである。

以上、ここまで行った新・旧女性の比較をまとめると、おおよそ以下のことが言える。

まず、第一に、男性人物の相手女性としては、早期作品においては新女性ヒロインに比重が置かれていたが、作者の作品発表が進むにつれ、旧女性がヒロインの中心となる設定がなされていることが言える。そして、第二として、新・旧ヒロインともに恋愛感情尊重型がメインヒロインを担う傾向にあり、いずれも男性主人公にとっての女性の理想像となっていることである。ここでいう理想像とは被抑圧者的な要素が抑えられ、新女性の場合が封建制度の抑圧を被らない段階であった少女時代の人物、旧女性の場合が主に封建制度に則り結婚し円満な生活を実現した人物のことを言う。

## 4. ヒロイン像の破滅型から生存型への展開

### 4.1 新女性像におけるメインヒロイン像からの失墜

まず、新女性の恋愛感情軽視型への変転がなされた背景には、主人公男性が日本への大学留学出発があり、「落蕾」、「山茶花」にある如く恋人関係解消が恋愛感情尊重型ヒロインの哀れな末路として示されている。筆者の先行研究<sup>37</sup>でも論述済みであるが、新女性が「地方生活」以前に発表された作品で往々に男性主人公の寵愛を受けるメインヒロインとして登場したのは、それら新女性人物が

---

<sup>37</sup> 「張文環小説における新女性像に見られる人物造詣の特殊性」(『育達科大學報第』33期、2012)、「張文環の戦前の小説作品における新女性像 - 理想像から現実像への展開」(『育達人文社會學報』第9期、2013)



作者の分身である男性主人公の異性憧憬の対象であったこと、そして男性の立場からの自由恋愛を享有できる存在だったからである。だが、男性側の性的欲求を満たすべく設定された新女性ヒロインの有する恋愛至上主義的考えの徹底が不可能であったのは、それら女性が台湾地方社会の出身であり、封建的結婚を受け入れる以外に生存が許されないという社会的環境と現実問題があったからである。このような外的抑圧が新女性ヒロインをして純然たる恋愛感情尊重型から俗世間的な恋愛感情軽視型に陥らせたものであり、例えば「落蕾」秀英の場合、その縁談と結婚をめぐり「矢張り理智を愛するとともに裕福な生活に対する好奇心を棄て得ないのだ」<sup>38</sup>とある如く、俗世間的な人間性の墮落が促されている。また、「山茶花」娟の場合では、男性主人公（賢）を恋人にした要因が、即ち賢が「村のはじめての大学生である」<sup>39</sup>身分や将来性が重視されたことが拒めず、物語が進展し、ヒロインに縁談がもたらされる場面に近づくにつれ、ヒロインに芽生えたその打算的、功利的、反道徳的な墮落の様子が露呈されている。<sup>40</sup>

即ち、前述の如く新女性がメインヒロインとして男性の理想で存在したのは純粋な恋愛感情を保てた少女時代に限られたものであった。少女時代から娘時代に跨るかたちで描かれたのが「山茶花」娟であるが、少女時代では愛する男性との恋愛に理解を示す恋愛感情萌芽型、娘時代では最初の頃は恋愛感情重視型たるものであったが、やがて結婚適齢期に近づくにつれ、結果的には、後の作品に於けるインテリ女性を主体とする新女性の恋愛感情軽視型登場を促した要因となっている。以下は作品「山茶花」からの引用である。

娟はいやにこざかしいきざな娘だと思つた。しかし子供達の人気を獲得するには娟を無視することもできない。一体に娟は賢の目から見れば憎らしさうな子である。彼女にはまるで世の中には恐いものがないやうに男の子の頬つぺたでも平気で撲ぐるのである。公学校へ入学した匆々まで第一学

38 同注8、p. 33。

39 同注33、p. 295。

40 実際のところ男性主人公（賢）は文学専攻であることから立身出世とは無縁な身分にあり、娟は短絡的に大学に進学した賢が将来自身に裕福な生活をもたらすと思込んでいるに過ぎない。以下は関連箇所からの引用である。「自分はこれから大学に行くが、しかし娟が思ふほど光栄でもなく、また出世もないのである。どう云ふやうな職業が割りあてられるか、これは高の知れてゐることだ。恐らく娟の想像してゐるやうな生活は半分も出来ないことは云ふまでもない。台湾の今までの例をみると、自分が金持でない場合は金持の婿になることである。」（「山茶花」、p. 295）



期も終らないと云ふのに、先生は娟を級長にしようと云ふので賢は娟を嫌ふやうになつた、むろん娟の勉強の偉さは好意がもてるが、優しみのない女の子はこれも化け物のやうで嫌ひだつた。<sup>41</sup>

このごろ娟が素直に見えるのは、ずるくなつたせみだと姉はかんじるやうになつた。彼女の思つてゐることはやつぱり我儘なことばかりであつた。しかし今までのやうに一本調子ではなく、うまく人の隙を狙つて自分の感情を押し出していくやうであつた。人間の感情が人間の感情の陰をつたつて歩く巧妙さには錦雲はあきれて了ふのである。もし娟が男であつたら姉は妹を末恐ろしい姿に思はれて仕方なかつた。<sup>42</sup>

ヒロインの自由奔放、男勝り、大胆といった性格面に関しては前述した如く、新女性の少女像ヒロイン特有の理想的側面である。だが、「山茶花」娟の場合、その後の娘への成長を見通した作者により、後に描かれる新女性の「地方生活」淑（恋愛感情軽視型）の如く打算的、我儘、身勝手、利己的という反面性も加味されているのが分かる。換言すれば、「山茶花」娟の場合、その登場が少女時代から娘時代に跨り、かつ、女性の人間性墮落を促す封建的利害結婚への対処が関与したことから、その内面性には恋愛感情軽視型の持つ要素がかなり濃厚に加味されているのである。

続く「地方生活」と「土の匂ひ」では、男性主人公の日本留学終了後が主な設定となり、「山茶花」娟の主人公の賢との破局（賢の日本留学出発と男女関係の破局を一体とみる）が基盤におかれ、男性主人公の新女性への愛着が消失したことで、「地方生活」淑、「土の匂ひ」阿鶯とも、かつての恋愛関係の愛憎や痛手の対象となり（即ち「地方生活」の主人公の場合は日本留学中における美術専攻の女留学生をめぐる失恋、「土の匂ひ」輝清の場合が日本留学前における素美との破局で示されている）、男性主人公から恋愛感情の懐けない現実主義的な女性としての設定となっている。「地方生活」淑の場合では、身分や将来性を重視した医学専門学校の学生との婚約が裏付けており、結婚後の嫁ぎ先における生活基盤確保を目的とした“嫁入りの際の持参金としての遺産相続の権利を主張し

41 同注33、p. 41。

42 同注33、p. 193。





た”挙動<sup>43</sup>は、「山茶花」娟の持つ「うまく人の隙を狙って自分の感情を押し出していく」という側面が連想される。そして「土の匂ひ」阿鶯の場合では、資産家に嫁いだことから、同様の恋愛感情軽視のありかたが伺え、また夫の死後での遺産相続をめぐる相手親族を敵に回した大金の確保、及びその後の女経営主としての株式会社設立による成功には「山茶花」錦雲が妹の「山茶花」娟に対して危惧した、「もし娟が男であつたら……未恐ろしい姿に思はれて仕方なかつた」という見方が反映されている。

メインヒロインをめぐる新・旧女性の交替は、作者の自伝的要素を題材とした男性知識人を主人公にした作品を中心に展開している。「山茶花」執筆後、主人公男性の日本留学終了と故郷での再出発を描いた「地方生活」、「土の匂ひ」においてメインヒロインの役割を担うのが伝統社会における生存型として描かれた古典的女性である。「山茶花」における新・旧ヒロインの娟と錦雲の設定は“新女性＝メインヒロイン、旧女性＝サブヒロイン”であったが、「地方生活」、「土の匂ひ」では、人物構成が変えられ、“旧女性＝メインヒロイン、新女性＝サブヒロイン”としての人物設定となる。

## 4.2 新女性から旧女性へ

作者と同年齢の異性が主に新女性であることで、旧女性は往々に作者自身にとって年上の女性である印象が強かったことで、早期小説作品では新女性側が男女恋愛に関わる男性主人公（作者の分身）の相手女性、旧女性の場合は封建伝統に虐げられてきた存在という見方が示されている。

その後、作者が旧女性の生存型を意識して最初に描き出した人物像が媳婦仔像であり、それに続くのが古典的女性である。まず媳婦仔の場合、作者の旧女性の現状における不合理な問題解決への意図があったものと思われ、敢えて旧女性

<sup>43</sup> 「地方生活」淑は家族や親戚が一堂に集う中、病床の父親に対し「兄さん達は全財産の半分づつ分けること。そして私達姉妹は十分の二で二人で分けることをはつきりと書いてほしいの。でないと後でかへつて面倒になるでせう」（「地方生活」p.306）と、遺産相続の権利を主張する。かくして、淑は家族親戚から親不孝で利己的な娘として痛烈な非難を浴び、実兄から絶縁を言い渡されながらも、本人はそれに動揺することなく毅然とした態度で二度と実家には戻らない覚悟を決め、その旨を家族一同に伝えるのである。それは主に「生活の確証されてる職業を持つてゐる所へ嫁に行くには、持参金を積んで行かなければ肩はばがせまくなる」（「地方生活」、p.307）という、伝統社会に生きる女性なりの苦難があったからである。



の生存型を描かんとする意図が強くあらわれ、物語ではヒロインの生活基盤確保の根拠が義理の親との信頼関係確立に置かれている。<sup>44</sup>ただし、幾多の作者の描いたヒロインの破滅型の要因となる肝心の恋愛感情の問題、即ち媳婦仔の将来的な生活基盤確立の障害となる“子供の頃から兄妹どうぜんに育てられた男女には恋愛感情が萌芽しない”という、円満な男女関係を保つべく根本的課題は未解決のままである。<sup>45</sup>凡そ、媳婦仔ヒロイン像の内面性や性格描写に着目した場合、「部落の惨劇」淑花、「媳婦」阿蘭らは、引っ込み思案、内向的、没個性的といった面が強く顕れ、異性の趣向に合致せず、結婚後における円満な結婚生活は望めない。即ち、結婚後、男性の愛情を満たすことに期待できないそれらヒロインの前途は暗澹たるものであり、夫ある身にありながら寡婦の如く生活を強いられた「みさを」や「闖雞」のヒロインと何ら変わるところがないと予想される。

旧女性の恋愛感情の満足の所在はあくまで結婚生活の持続にあり、そのためには異性からの愛情を十分に留められるだけの教養や資質が必要となる。新女性ヒロインの存在価値は、将来的に都会での立身出世を臨んでいた段階における男性主人公の恋愛感情を満足させる条件を満たしていたことにある。だが、作品「山茶花」において男性主人公の賢が地方生活である「田舎」を再評価し、その伝統的な良さを認識するに至り、理想的女性の比重がそれまでの新女性よりも旧女性へと傾くことになる。以下は関連箇所引用である。

娟は賢の目から見れば、あるときはまるで狐の生まれ代りのやうで怖気を

44 実際における媳婦仔の処遇がかのようなものでないことは、作者の1943年の雑文「媳婦撲滅論」に論じられている如くである。即ち、作者が作品「媳婦」で「北部地方はこの媳婦仔を悪用するものが多いが、少なくとも阿全の両親の場合はさういふものではない」（「媳婦」、p.312）と論じている如く、作者にとって実際の媳婦仔のイメージは、金で買われ金儲けのために利用される存在であるほうが強い。即ち「芸娘の家」采雲の如く金で買われ、成人後は「料亭」と呼ばれた男性客相手の風俗業で働かされる人物像こそが作者のイメージに近い媳婦の姿である。

45 以下は「部落の惨劇」淑花の媳婦仔の境遇に関する引用である。「……嫁と云つても今まで自分の妹のやうに育てられてきた鼻つたれ時代からの娘ではないか。（中略）淑花はじつ萬華が云ふほど無器用な娘ではない。たゞ媳婦仔と云ふのは、小さいときから兄妹の如く育てられてきたために、その子供時代の無格好な印象が脳裏にしみついていて、他人が見るほど淑花には魅力をかんじないのである。」（「部落の惨劇」、p.150）子供の頃から一緒に育てられた男女は恋愛感情の萌芽が困難である所以が示されている。引用では男性側の立場によるものだが、これは女性側からしても同然であり、「部落の惨劇」淑花、「媳婦」阿蘭の両者は、それら許婚に対し真の愛情を懐いているわけではない。「部落の惨劇」淑花、「媳婦」阿蘭が心掛けるのが、自己の生活基盤確保以外の何物でもなく、具体的には義理の両親に認めてもらうための伝統的女性たる婦徳観念を養うことのみである。



かんじるのである。(中略)それで賢は姉の方が好きだと云ふのも姉は花にたとへたら白い椿の花か百合の花のやうにやさしい。しかし娟はまだ堅い蕾ではあるが紅い少ししつこい花のやうに思はれる、赤い椿の花は頬つぺたの赤い田舎娘のやうで、(以下省略)<sup>46</sup>

「山茶花」は男性主人公の日本留学出発後を以って完結し、結末部分では新女性の娟との決別の意志が示されている。そして男性主人公の日本留学終了と社会人としての生き方を描いた「地方生活」、「土の匂ひ」では、物語の開始部分に、男性主人公の都会での立身出世に挫折した経緯と生まれ故郷での再起を決意した様子が論じられ、ここに新たな異性憧憬の相手であるメインヒロインとして設定されたのが古典的女性である。その生存型たる意義は、媳婦仔像の如く伝統や道徳には忠実であっても恋愛感情の欠如した存在とは違い、長期的に異性との恋愛感情を保ちながら円満な家庭生活の維持を可能とする存在に他ならない。

「山茶花」錦雲の場合、結婚後に人格に問題のある姑との確執により一時期、不運な結婚生活を過ごしたが、錦雲が生存型に属する人物であることは、その後の里帰りした様子から十分に推測される。

姉の顔を見た瞬間、娟ははつとくらい陰が脳裡をかすめていつたのをかんじた。金の腕輪や金の指輪、耳飾から御化粧まで、けばけばして、姉にふさはしくない飾方であると思つた。姉は少し肥つてゐるやうに見えた。僅か数箇月でそんなに変わるものだらうか、姉は百合の花のやうによわよわしかつたけれど、今の姉は咲いてる真紅な花にたとへられる女になつた。<sup>47</sup>

往來の作者の小説作品で幾度となく繰り返された、結婚問題をめぐりヒロインの行き着く悲劇的運命の図式はここには見られない。「山茶花」錦雲を代表とする古典的女性は「咲いてる真紅な花にたとへられる女」(紅い花は主に結婚後の女性を指す)とある如く、常に生存型の女性に属するものであり、その要因が、「古典的で可憐」、「懐古的でロマンチック」、「女の標本のやうに見えて、凡ての女性の模範」<sup>48</sup>といった伝統的女性特有の魅力にある。これら女性的魅力

46 同注33、p. 60。

47 同註33、p. 224。

48 同註33、p. 47。



はあくまでも女性本人が縁談や結婚を意識し、それに対処すべく養ったものであり、伝統的女性特有の恋愛感情尊重の表れでもあるとも言える。即ち、旧女性の恋愛感情尊重のありかたは、新女性の恋愛至上主義とはまったく異質なものである。以下は「地方生活」におけるメインヒロインである婉仔の設定に関する箇所  
の引用である。

婉仔も物心つく頃から、澤の嫁になると云はれぬるので、特別王家には親しみを  
持つてゐるが、本能的に思慮ぶかく、引っ込みがちで大膽に振るまはれなかつた。  
(中略) 婉仔をそのまま、王同年嬢さんの家に置く話も出たが、小さい時から媳婦仔をもらふことは、大人になつて、嫁合してみると、案外うまくいかない人がゐるのを見たので、やつぱり新娘は新娘らしいもらひ方をした方がいいと澤の母も、楊同年嬢さんとは同じ考えを持つてゐた。<sup>49</sup>

「地方生活」婉仔は媳婦仔像と古典的女性像の折中型であり、その造詣はかなり特殊なものとなる。ここには「部落の惨劇」、「媳婦」両作品のヒロインの人物設定がそっくり置き換えられ、下線部の箇所は婉仔が媳婦仔像となることを運命付けられたことを意味し、仮に「地方生活」婉仔がそのまま相手の家に貰われた場合、男女間の恋愛感情の欠如がもたらす結婚後の不幸が予想された。だが、本作品では男女の恋愛感情が重視される方向へと進展し、“幼い頃から兄妹のように育てられた男女は恋愛感情が生まれにくい”という恋愛感情欠如の問題処理に際し、作者は「止腹為婚」<sup>50</sup>という、幼少時から男女を一緒に住まわせず、成人するまでは別々に住まわせるという設定を施した。かくして、幼くして実家と婚家の双方から重宝され、「地方生活」婉仔は適齢期の段階になると、知性、道徳性において卓越した女性に成長する。こうして描かれた適齢期の婉仔は自己の恋愛感情を損なうことなく成長した旧女性における恋愛感情尊重型の数少ない女性の一人であり、縁談や結婚問題に際し多くの旧女性ヒロインが懐いた不安や恐れが一切払拭され、「山茶花」錦雲よりも更に徹底した理想化が施されている。また、「地方生活」は作者の分身として登場した男性主人公が円満な結婚生

49 同注22、p. 279。

50 同注22、p. 277。



活を実現した唯一の作品であり、作品における結婚生活は、相思相愛の男女による理想性に富んだ様子が示されている。その要因となるのが古典的女性の持つ魅力であり、かつての媳婦仔ヒロインの欠如した性格面や教養面といった内面性の改善である。

最後に、「土の匂ひ」における古典的女性について論じたい。この作品では男性主人公である清輝をめぐり、「地方生活」錦雲の分身である二人の古典的女性が登場する。そのうち、男性主人公の相手女性（清輝の恋慕する対象）として実質上のメインヒロインが「土の匂ひ」玉鑾である。「土の匂ひ」玉鑾は、作者による女性美に対する描写以外に、結婚後に姑との確執があった経過<sup>51</sup>など、いずれも「山茶花」錦雲と一致する。古典的女性における唯一の離婚女性となっているが、それは作者自身が旧女性の恋愛感情尊重型を意識し、男性主人公の相手女性、即ち恋愛対象であるヒロインとして設定したからに他ならない。主に作者が意図したのが「山茶花」錦雲の縁談と結婚により落胆し失望した男性主人公（賢）の叶わなかった異性憧憬の実現である。「山茶花」では、男性主人公（賢）がまだ学生の身分であり、既に適齢期にあった錦雲は賢にとって手の届かない存在であったが、「土の匂ひ」では男性主人公（清輝＝賢の分身）が大学を卒業して社会人となったことで、「土の匂ひ」玉鑾（錦雲の分身）は恋愛や結婚の可能な相手となり、物語では相思相愛とも感じ取れるプラトニックな男女関係が描かれている。

「土の匂ひ」の主人公の清輝をめぐり描かれたもう一人の古典的女性が「土の匂ひ」“姉”である。この「姉」という呼び名は、「山茶花」において錦雲が主人公（賢）から受けた呼称でもあり、「山茶花」における人物構成（男性主人公の賢と、彼が「姉」と慕う年上女性）の再現がなされている。この「土の匂ひ」“姉”が特殊であるのは、張文環作品において唯一、新女性的から旧女性への転

51 作者はその離縁に離縁の理由は夫婦間の愛情問題ではなく、主に嫁ぎ先の義理の親である姑の人格（即ち息子を溺愛し、嫁が気に入らない人物となっている）に問題があるものとしている。以下は関連箇所  
の引用である。「話に依ると姑との折合ひが悪くて、追われるやうい里にかへつてきたと云ふのである。顔は百姓女には、どちらかと云ふと不向きで、その點姑の意見に清輝は同意しない譯にはいかない、けれども仕事ももし立派にやつてゆけるならばいいではないか。いやさうもゆかない。その証據に、この嫁が来てから、とかく息子が病気がちになり、家運が傾きかかつたと云ふ。莫迦々々しいことだけれども、さういふ迷信も、根強い力を持つてゐるとすれば、（以後省略）」。（「土の匂ひ」、p. 40）



換を遂げた人物であるからに他ならない。以下は「姉」が新女性から古典的女性へと変化した様子が示された箇所引用である。

女學校三年生の時、家事上のことで中途退學しなくてはならなかつた。姉は性格的にやゝもするとひがみがちであつた。だが家事の手傳ひをする傍ら、毎夜、父から四書五經をおしへてもらつたりした故か、姉はすっかり家庭的な娘になつて、ひがみ所か、父の帳簿を手傳ふ事に興味をおぼへ、かへつて朗らかになつたやうであつた。<sup>52</sup>

ここでは女性の社会適応能力の優れた様が描かれ、伝統社会で生れるに相応しい女性へと転じた経過が示されている。新女性である「土の匂ひ」玉鑾が恋愛感情尊重型としての役割を担っているのに対し、この「土の匂ひ」「姉」の場合は主に旧女性の生存型を意識し造詣された傾向が強い。以下は、その古典的女性たる性格描写に関する箇所引用である。

いはゆる古い型の美人で帳簿は父親よりも慥かに上手だ。その上、國文も漢文も達者で、そんなところから田舎では評判になつてゐた。謙讓で何事を言はれてもハイハイと素直に受け、我慢強くもあるので、一見無性格のやうに見えるけれども、それでゐて風に柳のたとへの通り、折れさうでなかなか折れぬねばり強さがある。父も姉を信用して、山の竹紙製造工場との取引の會計は一切姉にまかしてゐた。<sup>53</sup>

古典的女性の性格とその社会適応の関連性が書かれ、ある意味、新女性が望む女性の社会的自立や個性の尊重の実現が見られる。また、旧女性の生存型としての意義が結婚生活の安定にあることであるが、この点も当作品において適当な解釈が施され、「土の匂ひ」「姉」が生存型として遜色のない人物であることが理

<sup>52</sup> 張文環「土の匂ひ」、『臺灣文藝』七月號(一卷第三號)、1944年7月、p. 13。

<sup>53</sup> 同注52、p. 13。



解できる。<sup>54</sup>

## 5. 結論

ここまで張文環小説のヒロインの人物設定の分析を行ってきた。今回の論述が意図するのが主にその生存型と破滅型、理想像と現実像、新女性と旧女性といった分類をめぐり、小説作品におけるヒロイン設定や発展のが女性像の恋愛感情の対処と密接に関わっていることの提示にある。

ここで理解できるのは、主に人物像の恋愛感情においては新女性と旧女性それぞれが価値観の対立した生き方を示しつつ、それぞれが実社会における適者生存へと発展していることである。新・旧女性の適者生存は、その成長過程を基準とすると主にその思春期にあった少女像、適齢期の娘像、結婚間もない女性像の三つに分類されるが、それぞれの恋愛感情の対処を基準にして、その人物像造詣の変化を考察した場合、以下のようになる。

### ○新女性像の恋愛感情のありかたと社会的生存をめぐる変移

- 一、男性主人公にとっての理想像から非理想像へ
- 二、封建社会適応における敗者型から勝者型へ
- 三、恋愛感情尊重から恋愛感情軽視の方向へ

### ○旧女性像の恋愛感情のありかたと社会的生存をめぐる変移

- 一、男性主人公にとっての非理想像から理想像へ
- 二、封建社会適応における敗者型から勝者型へ
- 三、恋愛感情軽視から恋愛感情尊重の方向へ

以上の両者の人物造詣で言えることは、まず、新・旧女性それぞれのヒロイン

---

<sup>54</sup> 旧女性の生存に関しては、主に結婚後における嫁ぎ先での円満な生活が実現できるが否かが問題となるもので、主に相手方の義理の両親との信頼関係の構築が大きな条件となる。以下は関連箇所引用で、ここでは“姉”（節）の結婚が恵まれたものであったことが示されている。「姉の舅は漢方医者で、閑のときなどは親戚中の子供を集め漢文を教へるついでに近所の子供もと、小さな書房などをも兼ねてみた。人となりも評判がよく（中略）さういふ舅であるために、姉の節は家ぢゅうのものに可愛がられてみた。ただ残念なことは、舅が初孫の顔も見ずに亡くなつてしまつたことである。」（「土の匂ひ」、p. 13）



が破滅型から生存型へと発展していること、そして、その主要な要素として人物像の直面した恋愛感情への対処のありかたが関わっていることである。

結論としては、作者張文環にとっての理想のヒロインが恋愛感情尊重型であることが挙げられるが、その基準はあくまで男性主人公の立場が中心であるということである。本論文中で取り上げたヒロインをめぐる男性主人公は作者の実生活を題材とした分身的人物が大半を占め、結果、各ヒロイン像には往々に作者の個人的な理想概念や主観性が反映されたものとなっている。具体的には作者のヒロイン造詣の観点の主が作者自身の体験に基づき、主に少年時代から日本留学出発前の学生時代におかれた場合、そこには自由恋愛願望や脱封建の考えが反映され、新女性が恋愛や結婚の対象となっている。そして、ヒロイン造詣の観点の主が作者の日本留学出発後から台湾帰国後の社会人としての立場におかれた場合、主に封建社会適応や結婚願望が反映され、旧女性が対象となっているのである。また、最終的に、「山茶花」や「地方生活」に見られる如く主に旧女性ヒロインが知識人タイプへとして登場したのも、基本的には高学歴取得のインテリ青年として描かれた男性主人公の趣向に合致することが意図されたからに他ならない。





## 参考文献

### テキスト

- 張文環。中島利郎編。『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』。1版。東京：緑蔭書房。1999年7月20日。
- 張文環。中島利郎編。『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』。1版東京：緑蔭書房。2002年8月31日。
- 張文環。『地に這うもの』。1版。東京：現代文化社。1975年9月15日。
- 張文環。「土の匂ひ」。『臺灣文藝』第一卷第三号。1944年7月。台中：臺灣文學奉公會。<sup>55</sup> p. 1～46。

### 研究著書、論文など

- 中島利郎。「張文環作品解説」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家作品集 第四卷[張文環]』。1版。東京：緑蔭書房。1999年7月20日。p. 335～345。
- 柳書琴・陳萬益・中島利郎編。「張文環著作年譜」。『日本統治期台湾文学 台湾人作家小説集 第四卷[張文環]』。東京：緑蔭書房、1999年7月20日。p. 347～359。
- 柳書琴（中島利郎訳）。「張文環『山茶花』解説—部落から東京へ、進退窮まった植民地の青年たち」。『日本統治期台湾文学集成2 台湾長編小説集二』。東京：緑蔭書房。2002年8月31日。p. 355～388。
- 陳英仕。「張文環『山茶花』析論」。『臺灣文獻』179。2012年3月。p. 155～196。
- 張文薰。「由『現代』觀想『故郷』—張文環〈山茶花〉作為文本的可能」。『台灣文學研究學報』第二期。2006年。p. 5～28。
- 張文薰。『植民地プロレタリア青年の文芸再生：張文環を中心とした「フオルモサ」世代の台湾文学』（東京大学大学院人文社会系研究科中国語中国文学専攻 修士論文）。2005年。
- 張文薰（中島利郎訳）。「立身出世を求める青年たち—『風俗小説』張文環新論—」。『日本台湾学会報』第4号。2002年7月。p. 56～80。

---

<sup>55</sup> 同注61。

